Mutsumi
睦眉会会報
vol.11
発行者
徳島大学睦眉会
徳島大学医学部保健学科同窓会
徳島県徳島市蔵本町3-18-15 〒770-8509
徳島大学医学部保健学科内
TEL 088-633-9067　FAX 088-633-9070
発行責任者　河田明男

ご挨拶

徳島大学医学部保健学科長
徳島大学大学院保健科学教育部長
徳島大学助産学専攻科長
多田　敏子

睦眉会の皆様、日頃は本学の教育研究についてご理解・ご支援を賜り、誠にありがとうございます。平成23年4月に、二宮恒夫先生の後任として、学科長を拝命しました。ご挨拶が遅れましたが、この場をお借りして、ご報告と今後のさらなるご協力を改めてお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

今年の3月には、地震、津波、原発の大事故という未曾有の災害が東日本に発生し、多くの方が甚大な被害を受けました。9月末を迎える今日においても、被災地の厳しい現状が報道されています。さらに加えて、台風によって近畿地区にも大きな被害が起こっています。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

本稿では、保健学科長としての抱負を二つ挙げたいと思います。一つは災害時の対策を具体的にしていきたいと思っています。幸いにも2010年春には、老朽化している保健学科の南側の棟の耐震工事が終了しています。徳島県で南海・東南海地震による取り組みがなされておりますが、推測される被害やマニュアル化された対応を超えた個人個人の判断力・行動力の必要性を今回の災害は教訓として示しています。教職員や学生が災害に対する意識を高め、防災訓練にも積極的に参加できるようにしたいと考えています。

もう一つは、保健学科、大学院の教育研究の質的向上です。睦眉会の皆様方に基盤を作っていただきましたおかげで、平成23年3月には大学院後期課程が完成年度を迎えました。9月までに、2人が大学院博士課程を修了し保健学博士号を取得されました。学部生や大学院生は、大学の宝です。高い資質を持った学生（院生）の皆様が、目的を持って主体的に学び、医療人としての実践を基盤とした研究力を持つことは、大学発展の原動力になります。皆さんが気持ちよく学べる環境作りにも力を入れたいと思います。

同窓会の皆様には、ご自身はもとより若い人たちに徳島大学医学部保健学科および大学院に関心を寄せていただけるように、ご支援・ご高配をいただけますようお願いいたします。

想定外と言わないために

徳島大学睦眉会会長
河田　明男
（徳島大学医学部附属診療放射線技師学校3期生）

東日本大震災からはや6ヶ月、甚大な人的・物的被害を出した台風12号も記憶に新しい。最大級に快適な毎日が突然に「非日常」の世界となる現実を目の当たりにした。風光明媚で四季を持ち快適な生活環境を整備してきた「現代日本」は、その根底が揺れている。プロの医療技術者である我々は、各々被災地に災害派遣された。専門職として一定の協力をし、今後も長期的な援助が必要である。しかし積極的な災害活動への参加は自己の家族、職場、コミュニティが安定してかつ安全であってこそ、初めて可能となる。だが今回誰もが突然、非日常の「被災者」の一人になり得る事を知らされた。

往時よく耳にした「想定外」という言葉だが、これを免罪符とはしたくない。通常の日々は、リスクコントロールの上に成立している事実を各々が深く考察しなければならない。医療は統計と確率の学問でもあるといえる。職務においては震災・津波・洪水及び放射線を想定して業務の継続手段を再検討しなければならない。家庭では家族の生命・近隣の安全の確保に努める。自己の生活基盤に不安を抱えていては医療者としての活躍は期待できない。災害時の対応キーワードに「自助・共助・公助」がある。まず自己・家族の安全を確保し、医療職としての専門分野の活躍、職場のインフラ確認の後に稼働可能な装置・機器を使用しての業務の実施。病院組織が一定の人的・物的能力を確保している事を確認後災害医療を実施する。

ここまで災害時の業務環境と自己の対応を再考すると、想定外の事態で対応に齟齬があったという説明に終始する状況は回避される。そこにある危機に如何に対応すれば良いのかを私なりに考えてみた。

笑顔の種、蒔けたでしょうか。
季節の花はきっと咲きます。

徳島県医療救護第５班（3月28日～４月1日）の一員として

徳島大学医学部附属看護学校27期生
徳島大学医学部附属助産婦学校22期生
徳島大学病院　　杣友　千寿

宮城県石巻市立万石浦中学校保健室が診察室でした。私が肌で感じた、あの情景・あの匂い・あの哀しみを語るだけの術を持ちあわせていません。これだけの情報社会に暮らしながら、マスコミから知り得る情報は、ほんの極一部にしかすぎないことに息を呑みました。座して状況は変えられません。誰しもが何か自分にできることをと、もどかしい思いの中、皆さんを代表して派遣していただいたことに、感謝いたします。

診察を受ける母親に代わって乳児を抱きながら、保健室の硬いベッドに横たわる方に点滴をし、背中のカーテン越しに診察を待つ多くの方々の気配を感じながら、あの時のことを涙ながらに語る方の手を握り、あの感情はまざまざと蘇ります。そして、ナイチンゲールに思いを馳せました。相手に寄り添い、静かな環境ときれいな水と空気、看護の原点であること。診療介助という顕在する健康問題、環境調整・疾患の徴候といった潜在する健康問題に、看護専門職だからこそでき得ることです。また、多分野にわたる知識と技術、心身共に体力、そして専門職が専門職として自律して役割が果たせるというチームワークは不可欠でした。

人災の側面は否めませんが、今も災害は続いています。自分にできることを継続する力、決して忘れない力、まだまだ私達にできること、すべきことはあります。

また、きたるべき災害への備え、東海・東南海・南海・日向灘の4連動地震が想定されていますが、これは地球規模・宇宙規模の自然の営みであり、人智の及ぶところではありません。自然は過酷ですが、人の残酷さに比べたらまだましかもしれません。しかし、人は力を合わせ物心共に備え、助け合うことはできます。看護職はともすると自己犠牲を厭わない強さを持ち合わせています。そうさせないためにもシステムを構築し、トレーニングを繰り返すこと、職場ではもちろん学校でも家庭でも、自然は人間に都合良く合わせてくれるわけではありません。

最後に、村上 仁士徳島大学名誉教授の言葉を記します。「あなた達が傷つかないこと、あなた達が死なないこと、それがあなた達の義務です。あなた達は、支援する側になるべき人達です。」

東日本大震災医療救護に参加して

徳島大学医学部附属助産婦学校33期生
徳島大学病院
森内　洋美

3月11日、東日本の地を襲った大地震、映し出されるすさまじい光景を見て、恐怖と悲しみに涙しながらも、何か役に立ちたいと感じていたのは、決して私だけではないでしょう。

今回、発災から約70日後の5月21日～5日間の日程で、医療救護班の一員として宮城県石巻市に入りました。仙台市内から救護所のある万石浦中学校まで50kmの道のりを2時間半かけて毎日通いました。北上川を渡ると景色は一変し、畑中や家の上に押し上げられた車、家財の流された家々と瓦礫の山。衝撃的でしたが、医療救護者として、地元医療への再生・継続へという時期に自分に何が一体できるのか、自問自答しました。

救護所へ来られる人は、慢性的な疾患の悪化や身内・友人を失ったことによるショック、精神的疲労からくるストレスなど、生活に密着した症状の訴えが殆どでした。救護班は、その中でも継続的に関わる必要のある症状に対しては、前後の班と情報交換を行い、必要時は保健師や地域の基幹病院との連携をとっていきました。そうする中で、救護班内のチームワークや他職種との連携、地元医療の再開状況を救護所に来られる人に伝えるために、正確な情報を得て、的確に発信していくことの重要性を改めて感じました。時期的に水道・電気などのライフラインが復旧しており、医療衛生材料も不足なく業務の遂行ができました。しかし、日頃恵まれた環境下で働いている私達が、物が不足しライフラインの閉ざされた中で、自分の手と目と経験を駆使して、看護師あるいは助産師として看護ケア・看護診断することができるだろうかと不安にも思いました。

今後、数年後に起こりうる南海大地震に備え、組織だけでなく各個人で何が必要であるのか、何ができるのかを真剣に考え行動にうつしていくことが大事であると考えます。

前列真ん中が本人→

東日本大震災 福島県南相馬市での検案業務（検案前放射線サーベイランス）活動報告

徳島大学医療技術短期大学部
診療放射線技術学科１期生
徳島県立海部病院
髙島　宏輔

"2011年3月11日 金曜日 午後2時46分"

この日のことを全国の多くの方が忘れることはないでしょう。

「東日本大震災」

このとき私は、現在勤務しております徳島県立海部病院（徳島県海部郡牟岐町にある）でいつもと変わらず勤務をしておりました。

ただいつもと状況が違ったのは、ちょうどその日はエックス線撮影装置更新のために新しい機器を搬入する日であり、午後から通常業務の傍らその準備に奔走しておりました。ですから、私自身は地震発生時に何が起きていたのかも全く知らず、初めて知ったのは院内受付前に設置してあるテレビのニュース映像に群がる人たちを見たときでした。（当院でこれだけの人が集まるのはあまりあり得ないほど…）

その後まもなく発令された津波警報。当院は過去に津波の被害に遭っている地域であり、地震、特に津波に対する恐怖心は強く、マニュアルもあるのですが、他の職員もパニック状態。外来診療中であったため、診察や処置中の患者さんや一般の見舞客の避難誘導、入院患者さん（移動可能者）や最低限の医療機材・薬品なども最上階へ移動させるなどの措置を講じていました。その矢先、私に声をかける人たちがいたのです。

「これはどうしましょうか?」

そうです。搬入した新しい装置も待避させた方が良いか搬入業者の方から声をかけられたのです。早々に待避場所を確保し、その後も慌ただしい1日であったことは今でも忘れられません。

その後、震災による被害状況は想像を絶するとともに、DMATなどの医療支援チームの派遣をはじめ、各方面からさまざまな支援の要請が頻繁になったのは皆様もご承知のことと思います。

特にわれわれ診療放射線技師には、福島第一原発における事故による人体への放射線被ばく調査などへの従事が放射線を取り扱う専門的立場として求められました。思い起こせば、阪神淡路大震災の時にも多くの支援が必要であった際には医療従事者としての我々の職種では、その能力を生かせることはほとんどなく、歯がゆい思いをしたことを記憶しております。地震・津波による自然災害がもたらした事故とはいえ、今回のような原発事故は本来あってはならないことです。ただ、現実として起きてしまったものに対する対応のなかで我々の職種が活躍の場を与えられ、それが求められているのであればと思い、私は職場の仲間などの理解も受け、支援に参加させていただきました。

私たちに与えられた任務は、福島第一原発周辺の行方不明者の捜索が徐々に開始されたことを受け、行方不明者が発見され身元確認などのための検案業務に際し、行方不明者の被ばく状況（ご遺体に放射能をもつ放射性物質が付着などしていないか）を測定し、捜索作業や検案作業に従事する作業者への影響がないことを確認する業務でした。

4月19日、同じ同窓生の先輩2名とともに徳島を発ち、福島へと向かいました。この時は東北新幹線もＪＲ福島駅までは運行しており、福島市まで移動しました。そこから先へ向かう交通手段がないため、依頼元である福島県警の方が車で迎えに来ていただき、そこから我々は南相馬市にある宿泊地まで送っていただきました。この日は4月にしては肌寒く南相馬市へと向かう道中には峠を越えるのですが、その車中では吹雪になるほどの雪景色でした。

翌日からの5日間、我々は2班に別れ検案所兼遺体安置所で業務に従事し、無事に任務を遂行して参りました。私たちが従事してきた業務については、発見されてきた行方不明者と接するという想像以上に厳しいものでありました。

被災状況もニュースなどの報道を実感させられました。私たちの宿泊ホテル周辺は津波の被害をあまり受けていない状況でしたが人影は見られず、また車で数分も移動すれば津波による被害をまともに受け、海岸線まで数キロ離れている場所にまで漁船が流れ着いてきており、そこから先も本来ならばあるべき家屋もすべて流され、海岸線まで見渡せるといったすさまじい地域でした。

今回の経験については簡単には表現できず、多くは語れませんでしたが、同じ国民がこのような被害に遭っている状況下で何らかの役割を果たしたいという思いで行かせていただきました。

近い将来、我々も何らかの自然災害による被害に遭うかもわかりませんし、避けては通れないかもわかりません。ただ、今回のような二次的災害による原発事故のようなことは絶対にあってはなりません。

私は、滞在した間に接した福島県の方々との思い出は一生忘れられません。自らや肉親・知人が被災しているにもかかわらず、そのほかの県民や我々支援に伺ったものに対しても手厚くお世話をしていただいた姿には尊敬の念でいっぱいです。

最後に、一緒に業務に従事していた福島県警の隊長からいただいた一言で終わりたいと思います。

「我々が受けた被災状況を出来るだけ多くの方に知っていただき、今後の教訓としていただきたい。そのためなら私たちはどのようなことでもご協力させていただきます。」

キャリアアップする卒業生

感染管理認定看護師を取得して思うこと

徳島大学医学部附属看護学校32期生
徳島大学病院
高開登茂子

皆様こんにちは。32期生の高開です。

私は、現在徳島大学病院の安全管理対策室感染対策部門で、感染管理看護師長として勤務しております。

平成18年に、感染管理認定看護師を取得したことは大きな人生の転機となりました。

人は、自分の仕事人生（キャリア）を振り返った時、人生半ばで自分を再評価する時期があると言われています。私は迷いながらも思うところあり、平成12年に一度徳島大学病院を退職いたしました。今から思えば、これがこの再評価の時期ではなかったかと思います。何か楽しみながらできる仕事があるかもしれない、一度看護をやめようとも思いました。

確かに、5年間自分の時間を多く持ちいろいろなことにチャレンジすることができました。でも何か物足りなさを感じていました。自分のやりたいことは何なのかはっきりと考えることができるようになり、徳島大学病院に再就職しました。夢だった感染管理の認定を取得するチャンスを病院に与えてもらいました。感染管理は日々大変でくじけそうなこともありますが、乗り切っていける自信がつきました。今は、徳島大学病院の良いところもたくさん見えてきます。すてきな同僚や先輩看護師の方、そしてがんばってる後輩がたくさんいます。

後輩の皆様、やりがいや価値を感じて仕事をすることは重要です。自分の目指す看護を探して楽しんで学びましょう。一緒にお仕事できる日をお待ちしています！

集中ケア認定看護師となって

徳島大学医学部附属看護学校34期生
徳島大学病院
中野あけみ

2002年に重症集中ケア認定看護師（07年より集中ケア認定看護師と名称変更）になって今年で早9年、来年には２回目の更新審査を迎えようとしています。認定看護師を志した頃の私は、卒後16年目の中堅看護師で、平成10年に新設された集学治療病棟（ICU・HCU・BCR）の副看護師長として、脇目も振らず急性期看護に没頭する日々を過ごしておりました。しかし、徐々に「どうして看護師は医師の指示がないと何もできないんだろう」「たとえ急性期であっても、看護師の判断でもっと自律した看護ケアが実践できるはずでは」「そのためには根拠に基づいた看護判断が述べられるようにならなくては」「もっと質の高い看護がしたい」という思いが強まる一方で、自分自身の看護実践能力や判断力、指導力に限界を感じ、もう一度学び直したいと痛切に思うようになっていました。そんな時、認定看護師制度に出会い、「これだ！」と体中からアドレナリンが湧き出したのを覚えています。

その後、上司や同僚・家族の理解と協力によって、県立中央病院の同期２名と共に、晴れて徳島県で第一号の認定看護師となることができ、現在に至っています。今は、集学治療病棟の看護師長として管理業務を行いながら、主にスタッフ教育を中心に活動を行っています。

集中ケアでは、生命の危機状態に置かれている患者の病態変化を予測し、それに応じて重篤な合併症を予防すると共に、人工呼吸器をはじめとするME機器や多数の薬剤のサポート下にある患者に対して、呼吸・循環・脳神経機能をはじめとするリハビリ看護を実践し、回復過程の促進を図るのが目標です。その際、患者が緊急かつ重症であるがゆえに、看護師のほんの少しの油断や判断ミス、看護介入の遅れが患者に重大な結果を招くことがあります。そのため、看護師は自らの能力を過信することなく、謙虚かつ誠実に看護に向き合わなければならないと常々自らを戒めつつ、より自律した看護実践を目指して、日々葛藤中です。

今はまだ認定看護師の名に恥じないだけの成果を残すことができておりませんが、今後は一人でも多くの後進を育てることを目標に、地道に頑張っていきたいと考えています。

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師として

徳島大学医療技術短期大学部看護学科２期生
徳島大学病院
原田　路可

私は、平成19年４月から半年間愛知県看護協会の教育課程で研修を受け、平成20年に脳卒中リハビリテーション看護認定看護師として認定されました。研修前までの約３年間SCUで勤務していましたが、正直「脳卒中」と「リハビリテーション」が一つの分野ということがしっくりしませんでした。しかし、教育課程で学ぶうちに自分が脳卒中急性期の重篤化回避だけを重点化して看護していたのだと気付きました。看護師は、患者さんが入院しているその期間だけ関わっています。しかし患者さんは、脳卒中発症から急性期・回復期・維持期と状態に合わせて病院あるいは施設や在宅へと移られますが、どの時期もその方の人生の一部分です。ですから、脳卒中患者さんに関わっている看護師のアウトカムの一つは、患者さんが脳卒中によって何らかの障害を持ちながらも将来、地域（在宅であれ施設であれ）で過ごすことができるように、生活を再構築できるよう支援することです。そのため、「脳卒中」と「リハビリテーション」が分化された分野ではなく「脳卒中リハビリテーション看護」という一つの分野なのだと納得しました。

現在認定看護師として、脳卒中急性期の重篤化回避のためのケアとリスク管理しながら患者さんの生活再構築を支援するためのADL向上に向けた早期リハビリテーションに取り組んでいます。具体的には、SCU離床基準を医師と協議し決定、その基準に沿って安全な離床、ADLを向上するために療養生活の中で患者さん自身がセルフケアできるように指導するなどです。また、医師、看護師、リハビリスタッフ、栄養士、医療ソーシャルワーカーによるチームカンファレンスを実施し患者さんや家族の思いに沿ったケアが提供できるよう活動しています。患者さんの状態を把握し、リスク管理をしながらセルフケアを促すことは、24時間患者さんに寄り添っている看護師だからこそできる看護だと思います。

今後は、自部署だけでなく、院内の他部署や院外の連携病院、地域へと脳卒中患者さんにより良いケアが提供できるように活動していきたいと考えています。

胚培養士として

徳島大学医学部保健学科検査技術科学専攻１期生
徳島大学病院
矢野　祐也

私は徳島大学保健学科検査技術科学専攻を卒業後、同大学院に進学し、その後、大学病院の産婦人科で胚培養士として勤務しています。胚培養士の仕事は、体外受精において卵や精子を扱うことですが、検査技師として習得した技術が日々のラボワークに生かされています。自分の行った仕事が患者様の治療成績に大きく影響するので、責任重大ではありますが、その分やりがいも感じられる仕事です。また、医師と接する機会も多く、そのことが自分にとって良い刺激にもなります。全国的に見ると、胚培養士の多くは私と同じ検査技師出身あるいは検査技師と兼任の方々ですが、農学部などで生物学を学んだ方々も胚培養士として働いています。現在のところ、日本哺乳動物卵子学会と日本臨床エンブリオロジスト学会がそれぞれ独立して認める学会認定資格があり、大学等で生物学等を学んでいれば、体外受精施設での１年間の実務経験を経ることで、これら認定試験を受験することができます。現在は別々の資格ですが、将来的にはこれらの資格が統一され、さらには国家資格となることが望まれます。昨今、胚の取り違えが問題となりましたが、施設の規模によっては専属の胚培養士が存在しないのが現状です。体外受精の仕事は煩雑で、他の業務の片手間にはできない仕事なので、ミスの防止や治療成績を維持するためにも、専属の胚培養士を置くことが望まれます。

最後に後輩へのメッセージとして、私は従来の検査技師の枠を超えて働くということで、検査部との環境の違いや、仕事に対する重圧から戸惑うこともありました。しかしながら今になって思えば、意外となるようになるものだな、というのが感想です。皆さんは検査技師として、あるいは他の職種としてステップアップする機会があると思います。その時は恐れずにチャレンジしてみて下さい。案ずるより産むが易し、意外と楽しいかもしれませんよ。

手塚　健一
てづか　けんいち

徳島大学医学部附属衛生検査技師学校
昭和40年卒業
(元)徳島県立中央病院　中央検査部技師長

昭和40年衛生検査技師学校を卒業後、徳島県立中央病院・中央検査部・病理部門で臨床検査技師として勤務。昭和52年細胞検査士の資格を取得され、永年にわたりがん検診、がん診断に従事。平成11年中央検査部技師長に就任。平成17年退職、その後も細胞診に従事され今日に至っている。

役員歴：㈳徳島県臨床検査技師会・会長、㈳日本臨床衛生検査技師会理事、四国臨床検査技師会・会長、日本臨床細胞学会都道府県代表者等で活躍される。

受賞歴：平成９年厚生大臣表彰、平成19年細胞検査士会功労賞、平成20年瑞宝双光章等を授与される。

これまで、がん診断をはじめとする医療の発展に多大な貢献をされてきた。

活躍する卒業生

徳島大学医学部附属診療エックス線技師学校　昭和37年卒業
（元）徳島大学医学部附属病院　放射線部技師長

卒業後、徳島大学医学部附属病院に勤務されましたが、翌年の昭和38年4月より愛媛県立北宇和病院に勤務となりました。その2年後の昭和40年4月より徳島大学医学部附属病院で採用され、平成10年4月に同放射線部技師長に就任されました。技師長就任時には中央診療棟の再開発にご尽力され、施設をはじめ設備等の充実を図り、最先端技術を満載した放射線部となりましたが、残念ながら平成15年の開院を待たずに、平成14年3月に退職されました。対外活動としては、社団法人徳島県放射線技師会の理事として活躍されました。また平成19年11月には、これまでの功績に対し瑞宝双光章を授与されました。

藤田　勝彦
ふじた　かつひこ

平成23年度 徳島大学睦眉会総会報告

日　時：平成23年7月4日（月）　18：30～19：30
場　所：徳島大学医学部　第二会議室

総会次第

1. 開会
2. 会長挨拶
3. 議事
   (1) 平成22年度事業報告
   (2) 役員会報告
   (3) 平成22年度会計報告
   (4) 会計監査報告
4. 議案審議
   (1) 平成23年度予算案、事業計画案について
5. その他
6. 閉会

平成22年度 事業報告

1. 新入生歓迎昼食会の開催 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成22年4月6日
2. 近畿地区放射線技師同窓会「藍眉会」への出席（会長）・・・・・・・・・ 平成22年4月17日
3. 総会・講演会の開催 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成22年7月11日
   ホテルクレメント徳島　（参加者　49名）
   第8回講演会　「徳島県における糖尿病医療観光の試み」
   松久　宗英　教授（徳島大学　糖尿病臨床・研究開発センター）
4. 徳島大学同窓会連合会交流会「びざん会」への出席（会長他　5名）・・ 平成22年7月24日
5. 徳島大学同窓会連合会交流会「関東びざん会」への出席（会長）・・・・ 平成22年10月2日
6. 睦眉会会報の発行 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成22年12月15日
7. 卒業式・医学部各賞授与式出席（会長他）・・・・・・・・・・・・・・・ 平成23年3月23日
8. 卒業・修了記念品の贈呈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成23年3月23日

役員会報告

1. 役員会開催状況（平成22年4月～23年7月）

年度	回数	開　催　日	場　所	参加人数
H. 22	1回	平成22年4月21日（水）	医学部第二会議室	11名
	2回	平成22年6月3日（木）	医学部第二会議室	16名
	3回	平成22年7月1日（木）	医学部第四会議室	22名
		総会開催 平成22年7月11日（日）	ホテルクレメント徳島	36名 (会員)
	4回	平成22年8月18日（水）	医学部第二会議室	18名
	5回	平成23年3月28日（月）	医学部第二会議室	20名
H. 23	1回	役員会・総会開催 平成23年7月4日（月）	医学部第二会議室	22名

2. 各種委員会開催状況

委員会名	開　催　日	場　所	参加人数
会報委員会	平成22年9月1日（水）	医学部第四会議室	9名
	平成22年10月1日（金）	医学部第二会議室	8名
	平成22年11月2日（火）	医学部第二会議室	5名
ホームページ委員会	随時		3名

3. 役員会・委員会における主な協議事項

1）睦眉会総会・講演会について
2）睦眉会役員改選について
3）睦眉会会報の発行について
4）睦眉会会員名簿の発行について
5）睦眉会の役員の委員会活動について
6）徳島大学同窓会連合会への協力について
7）ホームページの運用について
8）新入生歓迎昼食会開催について
9）卒業・修了記念品について

平成22年度　睦眉会会計報告

（平成22年4月1日～平成23年3月31日）

【収入の部】

項　目	金　額
本部会費（158名分）	3,185,000
貯金利子	442
繰越金	7,373,952
収入合計	**10,559,394**

【支出の部】

項　目	金　額
総会費用	249,578
印刷費・送料（会報代を含む）	1,314,051
会議費	269,995
慶弔費（入学卒業記念品，退職教員記念品代を含む）	648,760
雑費	76,877
支出合計	**2,559,261**

【収支決算の部】

総収入額	総支出額	次年度繰越額
10,559,394	**2,559,261**	**8,000,133**

平成23年3月31日　会計　市原多香子

会計監査報告

平成22年度の会計報告書を監査いたしました。会計処理は適正に、正確に処理されていることを証明いたします。

平成23年7月4日　監事　後藤美弥子
手塚　健一

＊以上の報告事項は、すべて承認されました。

平成23年度　睦眉会予算

（平成23年4月1日～平成24年3月31日）

【収入の部】

項　目	金　額
本部会費（154 名分）	3,080,000
貯金利子	500
前年度繰越金	8,000,133
収入合計	**11,080,633**

【支出の部】

項　目	金　額
総会費用	50,000
印刷費・送料（会報代を含む）	1,500,000
会議費	250,000
慶弔費（入学卒業記念品，退職教員記念品代を含む）	700,000
雑費	60,000
会報委員会活動費用	50,000
睦眉会事務室改修費用	3,000,000
予備費	5,470,633
支出合計	**11,080,633**

平成23年度　事業計画

1. 新入生歓迎昼食会の開催 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成23年４月６日
2. 徳島大学同窓会連合会　ニュースレター（活躍する卒業生）掲載 ・ 平成23年４月、９月
3. 総会の開催（役員会で総会に代える）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成23年７月４日
4. 睦眉会事務室改修 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成23年８～９月頃の予定
5. 徳島大学同窓会連合会交流会「びざん会」への出席（会長　他）・・ 平成23年10月30日
6. 徳島大学同窓会連合会交流会「近畿びざん会」への出席（会長　他） 平成23年10～12月頃の予定
7. 睦眉会会報の発行 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成23年12月頃の予定
8. 卒業式・医学部各賞授与式出席（会長他）・・・・・・・・・・・・・・・ 平成24年３月23日
9. 卒業・修了記念品の贈呈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平成24年３月23日

＊　予算案、事業計画案は、提案どおり可決されました。

平成22・23年度　徳島大学睦眉会　役員

（2011.12月現在）

役職		氏名	所属	勤務先	所在地	電話番号
名誉会長		多田　敏子	学科長	徳島大学医学部保健学科長 （徳島大学大学院HBS研究部：看護）	〒770-8509 徳島市蔵本町 3-18-15	TEL 088-633-9033
会　長		河田　明男	放	医療法人社団三愛会　三船病院	〒763-0073 香川県丸亀市柞原町366	TEL 0877-23-2341㈹
副会長		東條　幸美	看	徳島大学病院 西病棟４階	〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1	TEL 088-633-7230
		坂野　啓一	放	徳島大学病院 診療支援部　診療放射線技術部門	〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1	TEL 088-633-9090
		江原　　隆	検	徳島市民病院 中央検査科	〒770-0812 徳島市北常三島町 2-34	TEL 088-622-5121
		杉原　治美	助	徳島大学病院 地域医療連携センター	〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1	TEL 088-633-9401
理　事	事務局	梅野真由美	検	徳島大学大学院HBS研究部 医用検査学講座	〒770-8509 徳島市蔵本町 3-18-15	TEL 088-633-9067
	会　計	市原多香子	看	徳島大学大学院HBS研究部 看護学講座	〒770-8509 徳島市蔵本町 3-18-15	TEL 088-633-9038
		竹林　桂子	助	徳島大学大学院HBS研究部 看護学講座　助産学	〒770-8509 徳島市蔵本町 3-18-15	TEL 088-633-9081
	総　務	桑村　由美	看	徳島大学大学院HBS研究部 看護学講座	〒770-8509 徳島市蔵本町 3-18-15	TEL 088-633-7647
		富永　正英	放	徳島大学大学院HBS研究部 医用情報科学講座	〒770-8509 徳島市蔵本町 3-18-15	TEL 088-633-9863
		松浦千恵子	検	徳島大学大学院HBS研究部 医用検査学講座	〒770-8509 徳島市蔵本町 3-18-15	TEL 088-633-9069
		葉久　真理	助	徳島大学大学院HBS研究部 看護学講座　助産学	〒770-8509 徳島市蔵本町 3-18-15	TEL 088-633-9080
理　事		加根千賀子	看	徳島大学病院 西病棟９階	〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1	TEL 088-633-7662
		真鍋　理絵		徳島大学病院 東病棟２階	〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1	TEL 088-633-9321
		米田　好美		徳島市民病院 回復期・リハビリテーション病棟	〒770-0812 徳島市北常三島町 2-34	TEL 088-622-5121
		岩佐　京子		徳島大学病院 眼科外来	〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1	TEL 088-633-7161
		天野　雅史	放	徳島大学病院 診療支援部　診療放射線技術部門	〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1	TEL 088-633-9090
		山田　健二		徳島大学病院 診療支援部　診療放射線技術部門	〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1	TEL 088-633-9090
		山岡　哲也		徳島県立中央病院 医療技術局　放射線技術科	〒770-8539 徳島市蔵本町 1-10-3	TEL 088-631-7151
		笹川知位子	検	徳島県立中央病院 医療技術局　検査技術科	〒770-8539 徳島市蔵本町 1-10-3	TEL 088-631-7151
		阿部　房江		徳島大学病院 診療支援部　検査部	〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1	TEL 088-633-9307
		山田　順子		徳島県立中央病院 医療技術局　検査技術科	〒770-8539 徳島市蔵本町 1-10-3	TEL 088-631-7151
		中道　玲子	助	自　宅	〒770-0006 徳島市北矢三町 4-9-8-2	TEL 088-631-5801
		前田　恵子		徳島大学病院 小児科外来	〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1	TEL 088-633-7132
監　事		後藤美弥子	看	自　宅	〒771-0142 徳島市川内町沖ノ島 447-14	TEL 088-665-2491
		手塚　健一	検	自　宅	〒779-3124 徳島市国府町中 570-2	TEL 088-642-0324

徳大ニュース

徳島大学に関するニュースをお届けします。詳細は徳大広報並びに本学ホームページを御覧ください。
また、会員の皆様の御意見や御要望をお寄せください。

徳島大学総務部総務課（Tel:088-656-7021　Fax:088-656-7012）
E-mail：bunsyok@jim.tokushima-u.ac.jp　URL:http://www.tokushima-u.ac.jp/

Ⅰ　学内の状況

1　とくしま地域産学官共同研究拠点を開所

独立行政法人科学技術振興機構（ＪＳＴ）による地域産学官共同研究拠点の事業採択に伴い、５月24日、とくしま地域産学官共同研究拠点を常三島キャンパス・産学官連携プラザ内及びサテライト拠点として県立工業技術センターに開所しました。同拠点は地域経済活性化に向けて県と徳島大学が中心になり、最先端の研究で県内企業を支援するための施設です。LED（発光ダイオード）部門、エネルギー部門を設け、新しい応用製品を製造するための機器、省エネルギー製品を生み出すための装置など31台の機器を備えています。今後は企業からの申請を受け、備えた機器で研究開発を進め、企業の技術力向上と事業創出に役立つことが期待されています。

同日の開所式では、飯泉知事、香川学長らのテープカットに続き、大学や企業の関係者による見学会があり、「基板盤加工システム」、「微細構造観察装置」等の機器が公開されました。

2　株式会社ニコンインステックとの連携・協力に関する包括協定を締結

平成23年5月30日、徳島大学は株式会社ニコンインステックとの連携・協力に関する包括協定を締結し、調印式を行いました。

徳島大学は、平成23年1月に最先端の装置を導入した全国有数のイメージング施設であるバイオイメージングステーションを開設しました。そこには、実験動物用のPET、MRI、CT、in vivoイメージング装置や最先端の顕微鏡群が設置されています。これらの顕微鏡の導入については、これまでの技術開発の伝統と優れた実績をもとに次々と最先端顕微鏡を発表されている株式会社ニコンインステックのご協力を得てきました。この度、連携・協力関係をさらに強化し、相互の教育・研究の一層の進展を目指して包括協定を締結することになりました。

3　東日本大震災への義援金を日本赤十字社徳島支部へ寄託

平成23年6月3日、徳島大学は、東日本大震災義援金（第一次）880万円を日本赤十字社徳島支部に寄託しました。

義援金は、教職員の他、大学病院の患者さん、卒業式、入学式に出席した学生や保護者の方々から寄せられました。募金箱による義援金は、平成24年3月31日まで募集することとしています。

4　モンゴル健康科学大学に徳島大学オフィスを開設

徳島大学では、香川学長、玉置ヘルスバイオサイエンス研究部長ら関係者が6月18日にモンゴル健康科学大学を訪問し、モンゴル健康科学大学建物内に徳島大学オフィスを開設しました。

今後は、同オフィスを利用して（１）医療指導・協力について特に糖尿病関連、眼科関連、消化器内科関連、循環器内科関連、歯科インプラント関連、歯周病関連などの分野の教員のモンゴル健康科学大学への一定期間の派遣、（２）生薬学・天然物化学分野での指導・教育を行うとともに、薬用植物を含む天然薬用資源に関する共同研究の推進、（３）予防歯学分野での活動・研究に対して指導・協力を行うとともに、共同研究の推進、歯科衛生士養成教育の指導・協力、（４）遠隔医療・遠隔教育の構築の推進など、国際連携を推進する予定です。

Ⅱ　学生関係

1　入学式

４月６日、アスティとくしまで平成23年度入学式が挙行され、香川学長が合計2,025名（学部１年次1,318名、学部３年次54名、大学院修士（博士前期）課程515名、大学院博士（博士後期）課程118名、助産学専攻科20名）の入学を許可しました。

入学生を代表し、薬学部の坂本光さんの総代宣誓の後、学長から「幅広い知識と、物事を多くの違った様々な角度から見ることのできる力を会得されるよう願います」との式辞がありました。

Ⅲ　研究助成金

外部資金受け入れ状況（平成22年度）

共同研究	171件	348,760千円
受託研究	138件	963,750千円
寄附金	1,037件	1,346,257千円

編集後記

“天災は忘れた頃に来る”　という言葉はよく知られているが、今年は本当に災害の多い年回りとしかいいようがない。

3月11日14時46分18秒　宮城県沖で発生した東北地方太平洋沖地震、引き続いて襲ってきた言葉も出なくなるような大津波と福島第一原子力発電所放射能漏れ事故、さらには9月4日の台風12号による洪水・土砂災害などなど、これでもかといわんばかりの自然の脅威を見せつけられることになってしまった。

今回、災害派遣医療チームの一員として被災地に赴かれた同窓生の方々に原稿をお願いした。遠くない将来、起こりうるだろう東海・東南海・南海地震に備えて、社会人・医療人としてやれること、なすべきことの一助にしていただければ幸いである。

また、新たな資格を取得しパイオニア的に活躍している方々にも原稿をお願いした。いつの時代にも新しい風が吹いて、世の中は変化していくのである。

未曽有の大震災から半年を過ぎた今も、被災地の復旧・復興はほとんど進まず、多くの人々が苦しんでいる。早急な対策と息の長い支援が続くことを願って止まない。

徳島大学睦眉会理事
徳島大学医学部附属衛生検査技師学校５期生　松浦千恵子